

スペンサーの三つの「声」

——牧歌詩人としてのライフとキャリア¹

水 野 眞 理

エドモンド・スペンサー (Edmund Spenser 1552-99) は、チョーサーを敬い、英語による牧歌という新機軸の可能性を追求し、寓意物語詩『妖精の女王』(*The Faerie Queene* 1590, 1596) によってスペンサー連 (Spenserian Stanza) という詩型を残し、後世の詩人の (好むと好まざるにかかわらず) 念頭を去ることはなかった。その点では、彼が英詩史上の重要人物であることは否定できない。しかしながら、同時代のシェイクスピアやジョン・ダンが首都ロンドンで書いていたのとは異なり、スペンサーはイングランド生まれでありながら植民地官僚として居住したアイルランドで作品の大半を書いたことを考えると、「英詩の本流」と呼ぶことには少しばかり慎重さが必要になるかもしれない。彼はブリティッシュ・ポエトであったけれども、イングランドの周縁に生きたばかりでなく、アイルランドにおいても少数のイングランド人植民者の一人として周縁的な存在であった。

しかし、少なくともいえることは、スペンサーは、詩の歴史の中での自らの位置づけを強く意識していた、ということである。本論文では、スペンサーの

1 本論文は日本英文学会第 81 回大会 (2009 年 5 月 30 - 31 日 東京大学) におけるシンポジウム第二部門「英詩の本流スペンサー」での発表原稿に加筆、訂正したものである。文中で言及したラテン語作品に関して、京都大学の高谷修先生から多くの教示を受けた。

詩人としての自己がどのようにとらえられ、また表出されているかを初期の作品である牧歌『羊飼の暦』(*The Shepheardes Calender* 1579)と後期の作品である『妖精の女王』第6巻(1596)を中心に検討し、スペンサーが生涯、牧歌詩人としての自己を重視していたことを明らかにする。

その際、スペンサーの自己言及的な書き込みを、「登場人物の声」、「語り手の声」、「詩人の声」に分けて考える。最もフィクション性の強い「登場人物の声」の中で注目に値するのは、複数の作品に共通する羊飼いコリン・クラウトの声である。次に「語り手の声」もテキスト内で発せられるが、スペンサーが手がけた叙事詩、恋愛詩、風刺詩、などさまざまなジャンルによって、その声音を異にしている。最後に「詩人の声」は、作品に付された序文、献呈詩、書簡といった本文を包む部分、ジュネット(Gerard Genette)の言葉を借りれば「パラテキスト」に現れている²。従来の伝記的アプローチには、文学テキスト内にある第一、第二の声、すなわちコリン・クラウトの声と語り手の声にスペンサーの人生と真情を聞き取る傾向があった。しかし、20世紀の終わりがごろからパラテキストである第三の「詩人の声」が注目されてきている³。これら三つの声をスペンサーは慎重に使い分けているが、ときにそれらが交じり合ったり、「詩人の声」が本文のテキスト内に乱入してくる場合があり、そのような瞬間に、スペンサーの意識がもっとも露わになるといえる。

2 ジュネットは『スイユーテキストから書物へ』(原著 *Seuils*, 1987. 英訳 *Paratexts: Thresholds of Interpretation*, 1997)において、「テキストを取り囲み延長することによって、まさにテキストを *présenter* している」ものを「作品のパラテキスト *paratexte*」と名付け、さらにそれを書物の内部にあるペリテキスト *péritexte* と外部にあるエピテキスト *épitexte* に二分した。前者に属するのはタイトル、序文、章題、注、挿絵などであり、後者に属するのはインタビュー、対談、書簡、日記などである。従って、『羊飼の暦』に認められるパラテキストは厳密にジュネットに従うならペリテキストと呼ぶべきかもしれないが、一般によく用いられる呼称を使うことにした。

3 *Studies in the Literary Imagination* 38 巻 2 号 (2005) は *The Faerie Queene* (1590) のパラテキスト特集を組み、「正誤表」、「ローリーへの書簡」、「献呈詩」「推薦詩」を論じる 10 篇の論文を集めている。

1. 官僚としてのキャリア

Bureaucratic career (titles in bold letters)		Publication (pastorals in bold letters)	
1552?	Born in London		
1568	Admitted as syzar to Pembroke Hall, Cambridge U	1569 Translates Bellay and Petrarch in <i>A Theatre for Worldlings</i> (anonymous)	
1573	BA, Cambridge U		
1576	MA, Cambridge U		
1578-79	Secretary to John Young (Bishop of Rochester)	1579 <i>The Shepheardes Calender</i> (As ‘Immerito’)	
1579	Serves Earl of Leicester (?)		
1580-82	Secretary to Arthur Lord Grey de Wilton (Lord Deputy of Ireland)		
1581-88	Registrar or Clerk of Faculties in the Irish Court of Chancery		
1581	Lease of castle, manor, abbey, monastery of Enniscorthy, and of friary at New Ross, Co. Wexford		
1582-	Lease of New Abbey, Co. Kildare (21 years)		
1583-	Commissioner for Musters in Co. Kildare		
1585	Secretary-like service to John Norris (President of Munster)		
1587-93	Deputy to Lodovick Brysket (Clerk of the Council of Munster)	1589 Raleigh visits Kilcolman Returns to England with Raleigh	
1588-	Acquires Kilcolman (3000 acres of land and castle) As a colonial undertaker establishes a colony of 6 householders		
1591	Granted a life annual pension of £50 by Queen Elizabeth	1591	Complaints
		1592	Daphnaïda Axiochus
1594-	Queen's Justice for County Cork	1595	Amoretti and Epithalamion Colin Clouts Come Home Againe
		1596	Completes? A View of the Present State of Ireland The Faerie Queene IV-VI, Prothalamion, and Four Hymnes
1598-	Sheriff of Cork Kilcolman Castle sacked Delivers a letter of Sir Thomas Norris (President to Munster) to the Privy Council at Whitehall	1598	A View of the Present State of Ireland entered in Stationer's Register ‘A brief note of Ireland’
1599	Dies at Westminster (January)		

表1 スペンサー関連年表

表1はスペンサーの官僚としての経歴と詩人としての出版物をまとめたものである。スペンサーはロンドンの仕立て職人を父として生まれ、ケンブリッジ大学には貧しい給費生 (syzar) として入学した。従って、ケンブリッジを卒業したのは就職する必要がある、大物聖職者であるロチェスターの主教ヤング (John Young) の秘書から始めて、アイルランド総督グレイ卿 (Arthur Lord Grey de Wilton) の秘書となり、その後は、次第に収入の多い官職を歴任するようになっている。職種としては最初に就いた秘書職の延長線上にある仕事が多く、高位の役職にある人々の公的な書簡をスペンサーが代筆したものが多く残っている⁴。またアイルランド南部のカトリック系修道院や反乱者から没収された土地・建物の保有権を手にし、また植民請負人の一人として、3000 エーカーあまりの土地にイングランド国内から植民者を誘致するに到った。スペンサーがこのように極めて実利的な人生を送ったことは念頭に置いておくべきであろう。

1580年、28歳ごろにアイルランド総督に従ってアイルランドに渡って以来、スペンサーの本拠はずっとアイルランドにあったが、彼は故郷イングランドでの官職を求めてもいた。エリザベス女王を中心に据えた長編寓意詩『妖精の女王』を書くことによってイングランドのナショナル・ポエトたらしめたことはよく知られているが、その中に、獵官運動の要素がなかったとは言えまい。しかし、強硬なプロテスタントの陣営に身を置いていたスペンサーは、当時の女王の側近パーリー卿ウィリアム・セシル (William Cecil, 1st Baron Burleigh 1521-98) には気に入られず、結局生涯をアイルランドで過ごすことになった。スペンサーの官僚としてのこのような運命を不遇とみなす従来の見方に対し

4 オクスフォード大学から刊行中のスペンサー作品集の一部として、2009年、スペンサーの作成した公文書が Burlinson と Zurcher によって編集、出版された。これは文学作品とはいえない文書を一卷にまとめる、という異例の出版であり、官僚としてのスペンサーが詩人としてのスペンサーとどのように関わるのかを解明する重要な手がかりを与えてくれる。

て、最近では、彼の貧しい出自を考え、アイルランド植民という時代の趨勢に乗って、つぎつぎと官職や不動産を手にしていったことをむしろ幸運とみる見方が主流になりつつある。（Rumbus, “Spenser’s life and career” 30）

2. 詩人としてのキャリア

次に、創作者としてのスペンサーのキャリアに目を移してみよう。表1の右欄の太字は牧歌の要素を含む作品である。彼にとって詩作は、ワイアット（Thomas Wyatt）、サリー（Henry Howard, Earl of Surrey）、シドニー（Philip Sidney）といった同時代の貴族の詩人が手すさびで書き、マニュスクリプトの形で回覧していたのとは異なり、完成し次第、出版するべきものであった。しかし一方でスペンサーにとってそれは、シェイクスピアのようにそれを売って身を立てる手段ではなかった。彼の人生は、官職で金を得、詩作で名声を得る、というまさに二足のわらじであって、いずれにも多くのそして真摯なエネルギーを注いでいたのである。

項目		書き手
Title Page	Sir Philip Sidney に献呈	(Spenser / Hugh Singleton)
“To His Booke”	Sir Philip Sidney の庇護を求める	(Immerito = Spenser)
Epistle Dedicatory	Cambridge の先輩・友人 Gabriel Harvey に献呈	(E.K. ≡ Spenser)
General Argument	牧歌論を含む作品解説	(E.K. ≡ Spenser)
各月×12	木版画挿絵	(?)
	Argument	(E.K. ≡ Spenser)
	Eclogue 本文	(Immerito = Spenser)
	Emblem	(Immerito = Spenser)
	Glosse	(E.K. ≡ Spenser)
Epilogue		(Immerito = Spenser)
Publisher’s Mark		(Hugh Singleton)

表2 『羊飼の暦』の構成

スペンサーの創作者としてのキャリアは事実上、1579年の牧歌『羊飼の暦』に始まる。まったくの無名詩人であったスペンサーは自らを本名ではなく「値しない者 (Immerito)」と呼んで、匿名でロンドンのシングルトン (Hugh Singleton) の書肆よりこの作品を出版した。しかし、表2に示すように無名詩人の処女作にしては『羊飼の暦』は実に手の込んだ仕掛けを持っている。

まずスペンサーはタイトルページの次に「作者から本へ」(“To His Booke”)と題する詩を置いて「詩人の声」で自らの作品に呼びかけ、遠慮がちに作品を世に押し出すとともに、文人・貴族フィリップ・シドニーの庇護を求める。

To His Booke.

Goe little booke: thy selfe present,

As child whose parent is vnkent:

To him that is the president

Of noblesse and of cheualree,

And if that Enuie barke at thee,

As sure it will, for succoure flee

Vnder the shadow of his wing,

(*The Sheperdes Calender*, “To His

Booke.” 1-7 下線は筆者。以下の

引用における下線も同様。)



TO HIS BOOKE

*Goe little booke: thy selfe present,
As child whose parent is vnkent:
To him that is the president
Of noblesse and of cheualree,
And if that Enuie barke at thee,
As sure it will, for succoure flee
Vnder the shadow of his wing,*

図1 *The Sheperdes Calender* (1579),
“To His Booke” 冒頭

冒頭の「行け、小さき本よ」という自作への呼びかけはチャョーサーの『トロイラスとクリセイデ』(*Troilus and Criseyde* 1380年代)の跋文を模倣しているとされる。

Go, litel book, go litel myn tragedye,

Ther God thi makere yet, er that he dye,

So sende myght to make in som comedye!

But litel book, no makyng thow n'envie,

But subgit be to alle poesy:

And kis the steppes, where as thow seeest pace

Virgile, Ovide, Omer, Lucan, and Stace. (*Troilus and Criseyde*, 1786-92)

しかし我々は、「ねたみ」のとらえかたが、スペンサーによってずらされていることに注意を払う必要がある。チョーサーは 1789-90 行目で自作にむかって「ねたまず (n'envie)、あらゆる詩に従え」と告げる。1786 行目で「小さき本よ」と呼ぶことと、この卑下の身振りはディコーラムに適っている。それに対し、スペンサーではねたみは外の世界から作品にむけられるものとなっている。スペンサーは「ねたみ (Enuie) が汝に吠えてきたら／そして吠えてくるに決まっているが」と、むしろ得意げに自作への評価を期待するのだ。さらに、二人の詩行には発話者の位置についての違いも見取れる。チョーサーは(現代人の目からすれば不合理ではあるが) 作品内で、しかも語り手がトロイラスの運命を語る途中でいきなりこの一節を述べ始める。そこには詩人チョーサーと作品中の語り手との境界はない。それに対し、スペンサーの「行け、小さき本よ」という呼びかけは、本文の外枠の上に立つ詩人の声である。スペンサーは牧歌の「語り手」と自らを分離し、牧歌の「書き手」としての自己を強く主張している。

また、出版する本に呼びかけることはチョーサーだけの専売ではなかった。古くはオウィディウスが追放先の黒海沿岸で書き綴った『悲しみの歌』(*Tristia*)を送り出しながら「小さき本よ」(Parue...liber)と呼びかけている。『悲しみの歌』は 1572 年、チャーチャード (Thomas Churchyard) によって 5 巻のうちの 3 巻が英訳され、1574 年には注釈つきラテン語原典がロンドンで出版されるなど、当時では『変身譚』(*Metamorphoses*) と並んで注目される作品で

あった。チャーチャードが流行の 14 音節韻 (fourteener) あるいはバラッド韻 (ballad metre) と呼ばれる七歩格で訳した英訳の冒頭 4 行は次のようになっている。

My litle booke (I blame the not) to statelye towne shall go.
 O cruell chaunce, that where thou go, thy maister may not so.
 Go now thy way; yet sute thy selfe, in sad and simple geare,
 Such exiles weede as tyme requyre, I will that thou do weare.
 (Ovid, *Tristia*, I, i, 1-4. Tr. Thomas Churchyard. 1572)

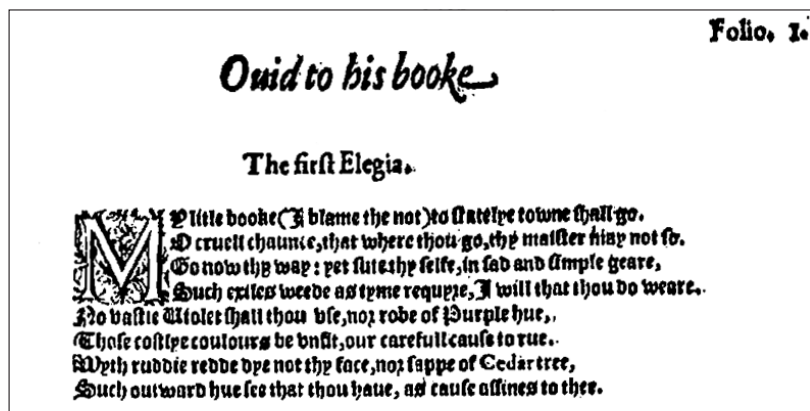


図2 Ovid, *Tristia*, I, i, tr. Thomas Churchyard. “Ouid to his booke” 冒頭

このページの上端には、“Ouid to his booke”という見だしがあり、スペンサーの“To His Booke”はこちらとの関係をも強く匂わせる⁵。また中世の英国ではチョーサーに続いてリドゲイト (John Lydgate of Bury)、キャクストン (William Caxton)、スケルトン (John Skelton)、ホーズ (Stephen Hawes) も同様の呼びかけを行い、イタリアではボッカチオ (Giovanni Boccaccio) も自らの作品に呼びかけている⁶。擬人化された書物への呼びかけはこのように、詩人の共同体

への加入の宣言であった。

一方スペンサーは作品の末尾のエピローグにあたる部分で、詩の永続性を誇りつつ、古典の詩人たちへの敬意を歌う。

*Loe I haue made a Calender for euery yeare,
That steele in strength, and time in durance shall outweare:
....
Go lyttle Calender, thou hast a free passeporte,
Goe but a lowly gate emongste the meaner sorte,
Dare not to match thy pype with Tityrus hys style,
Nor with the Pilgrim that the Ploughman playde a whyle:
But followe them farre off, and their high steppes adore,
(The Shepheardes Calender, Epilogue1-2, 7-11)*

冒頭2行では時の破壊力を超える芸術作品という、ホラティウス、オウィディウスでもお馴染みのモチーフが⁷、後半では、再び「小さき暦よ」という呼びかけに続いて、詩作の先人たちへの敬意というモチーフが歌い込まれる⁸。

5 スペンサーがチャーチヤード訳の『悲しみの歌』を参照している、と推測される根拠がもう一つある。上記の引用における「地味で質素な服装に身を固め／時の要請に従い、(追放者の衣を)纏いなさい」というオウィディウスの自作への語りかけと、スペンサーの『妖精の女王』序文冒頭における「かつて私のミューズは時の教えに従い、卑しい羊飼いの衣を纏い」(I the man, whose Muse whylome did maske,/ As time her taught, in lowly shepherds weeds,) の語句の類似である。

6 “Go little book” の定式表現の中世における用例については Schoeck および Tatlock を見よ。

7 Horace, *Odes*, III, 30, 1-5 および Ovid, *Metamorphoses*, XV, 871-72. なお、後者は1567年に Arthur Golding の英訳が出版されている。

8 上に引用した『トロイラスとクリセイデ』において、チョーサーは、ウェルギリウス、オウィディウス、ホメロス、ルカス、スタティウスを敬うよう、自作に説いている。

つまり、『羊飼の暦』の冒頭と末尾において、スペンサーは単にチャーターに敬意を表して模倣しただけではなく、自らの作品を世に送り出す詩人の振る舞いをする事により、古代から中世を経てルネサンスに至る詩の歴史の光の中に自らを置いているのである。無名詩人としての処女作を世に送り出しながら、スペンサーが自らを長い射程の中に位置づけていることが理解されよう。しかも、“To His Booke”は泥臭い四歩格、エピソードは洗練されたラテン詩風の六歩格、と明らかに異なる韻律が用いられている。本文中で12の月ごとに内容に合わせて韻律が変えられていることとも考え合わせると、スペンサーがこういった外側の部分においても、詩の伝統を踏まえつつ、形式上の実験を試みていることが分かる。

『羊飼の暦』の序文とエピソードの間に置かれている部分は、E.K. というイニシャルだけで知られる謎の人物によるスペンサーの友人ハーヴィ (Gabriel Harvey) への献呈の辞、全体の梗概 (General Argument)、そして月ごとの木版画、月ごとの梗概 (Argument)、登場人物の寓意 (Emblem)、そして詳細な注釈 (Glosse) という分厚いパラテキストの衣に包まれている。献呈先がハーヴィとなっているにもかかわらず、『羊飼の暦』の真の献呈先は、表紙に明示され、“To His Booke”に暗示されるフィリップ・シドニーであった。何故なら、ハーヴィはこの作品の出版当時、ケンブリッジ大学トリニティ学寮のフェローであり、たとえ彼が、献呈辞での呼びかけ「いとも優秀にして学識深き雄弁家にして詩人」のとおり的人物であったとしても、通常著作を献呈されてその作品と作者を庇護下におけるような地位にはなかったからである。従って、この献呈の辞は遊戯的な色彩を帯びたもの、と考えられる。友人 E.K. という人物の正体に関するさまざまな議論はあるが、現在のところ、E.K. はスペンサー自身か、あるいは少なくともスペンサーと極めて親しく、スペンサーの思いを代弁する人物と考えられている⁹。そうであれば、スペンサーは自分で自分の作

9 ジョンソン (Lynn Staley Johnson) は E.K. はスペンサーの創作だと推定している。(26)

品の献呈、紹介、梗概と注釈をプロデュースしていることになる。16世紀の後半にこのような形で出版されていたのは、主にウェルギリウス、ホラティウス、オウィディウスなどの古典であった。それらには、ラテン語原文や英訳の余白に注釈がつけられるばかりでなく、注釈者や翻訳者によって全体の、または巻ごとの梗概、そしてイントロダクションを兼ねた散文の献呈辞、作者の伝記などが付けられるのが普通であった。スペンサーが『羊飼の暦』で行っているのはまさにそういう本作りだったのである¹⁰。『羊飼の暦』の特異性はただ厚ぼったい衣のようなパラテキストがついているということではなく、古典でもなんでもない新しい英語の作品の、しかもまったく無名の詩人の作品の初版の段階でパラテキストがついていることにあるといえよう。つまり、『羊飼の暦』は古典のパステイーシュとして書かれ¹¹、それはおそらく当時の読者も了解済みのことであった。『羊飼の暦』がその後、人気を得て何度も版を改めて出版された際にも、通常これらのパラテキストを含めて版が組まれた、という事実は、その理解を補強するものと考えられる¹²。しかし、『羊飼の暦』をパステイーシュと見るならば、パラテキストと見えたものは、実は、パラテキスト風のテキストということになる。“To His Booke”やEpilogueでの詩人の声、と見えたものもまた、演じられた「詩人というペルソナ」の声であることが見

10 ヘニングァー (S.K.Heninger) はサンナツァーロ (Jacopo Sannazaro) の牧歌『アルカディア』(Arcadia) にサンソヴィーノ (Jacopo Sansovino) が梗概 (Argomenti) をつけたもの (1571) をスペンサーが真似たと推測している。しかし、ゴシック体を含む複数の活字体の組み合わせ方、および入手の容易さを考慮すれば、おそらく1575年にロンドンで出版されたフレミング (Abraham Fleming) 英訳のウェルギリウスの『牧歌』(The bucolikes of Publius Virgilius Maro) を模倣した可能性のほうが高いといえるだろう。

11 ジュネットは『スイユ』において、「虚構的な (fictionnel)、あるいはもしそうよびなければ遊戯的な」序文を扱っているが (318)、『羊飼の暦』の献呈辞や梗概はこれに類するものと考えられる。

12 The Shepherdes Calender は初版 (1579) の後、1581, 1586, 1591, 1597, 1611, 1617, (全集の中で 1611, 1612, 1613, 1617), 1679 と繰り返し刊行されているが、常に E.K. によるとされる部分を含んでいる。

えてくる¹³。

次に、『羊飼の暦』の本文に登場する人物たちの声に注目してみよう。コリン・クラウト (Colin Clout) をはじめとする羊飼いたちは、詩の提喻 (synechdoche) でもある牧歌の伝統に従い、羊飼いの衣を纏った詩人でもある。



Ægloga prima.

図 3

The Shepheardes Calender
“Januarye” 挿絵



Ægloga sexta.

図 4

The Shepheardes Calender
“June” 挿絵



Ægloga Duodecima.

図 5

The Shepheardes Calender
“December” 挿絵

13 後に恋愛ソネット集『アモレッティ』(Amoretti 1595)において、スペンサーは「詩人というペルソナ」、「恋人というペルソナ」など、さまざまなペルソナを使い分けている。この問題に関しては拙稿「『アモレッティ』—演技する恋人・演技する詩人—」参照。

中でもコリンは笛を吹き、歌も歌える羊飼いとして作品の牧歌世界で尊敬を集める重要な登場人物である。しかし、彼は、終始憂鬱で、自信なさげで、野心を持たない。

1月では寒い季節にふさわしく恋の不首尾を嘆き、自分の muse の力不足を認めて、詩の象徴である麦笛を折り捨てる。6月では、Muse にも軽蔑され、自分だけのために笛を吹く、と言う。11月では別の羊飼いに促されてようやく一曲 Dido の死を悼む哀歌を歌うが、12月では老いと死を予感して歌に別れを告げる。1月、6月、12月の牧歌に添えられた木版画のいずれにもおいても、コリンの足元には折られた笛が描かれており、挿絵画家がコリンの絶望を意図的に表現していることが示されている。書き手スペンサーが挿絵画家に対し、指示を送った可能性も高い。注釈者 E.K. はコリンが作者自身である、と断言しており、コリンがスペンサーの分身であるということは、従来疑いのないこととして受け入れられてきた。しかし、先ほど見たように、古典のパステーションを書くことで古典と張り合おうとしている若き詩人スペンサーと、老いてゆく憂鬱なコリンとは必ずしも一致しない。

若い詩人としてのスペンサーの野心を代弁するのは、むしろ 10 月の牧歌で詩について議論するピアズ (Piers) とカディ (Cuddie) である。ピアズはカ



図 6
The Shepheardes Calender
“October” 挿絵

ディに対し、牧歌を捨てて叙事詩を書くように勧める¹⁴。

Piers

Abandon then the base and viler clowne,

Lyft up thy selfe out of the lowly dust:

And sing of bloody Mars, of wars, of giusts.

Turne thee to those, that weld the awful crowne,

To doubted Knights, . . . (*The Shepheardes Calender*, “October”, 37-41)

この部分のもとになっているのはウェルギリウスが『アエネーイス』(*Aeneis*)の冒頭につけたとされる宣言で、これは現在では、未定稿段階のものとして本文からははずされているが、16世紀の英訳本や注釈本では必ず、ここから始められている。ウェルギリウスは自らの過去の作品である牧歌、次に農耕詩を回想し¹⁵、いまや叙事詩で軍神と戦を歌う、と宣言する。以下に示すのは16世紀における『アエネーイス』の英訳で、これも流行の七歩格に訳されている。

I That my slender Oten Pye in verse was wont to sounde

Of woodes, and nexte to that I taught for husbandmen the grounde

14 牧歌の中の登場人物が、ジャンルとしての牧歌を否定するというのは一見奇妙に思えるかもしれないが、もともと牧歌というジャンルが、牧人のキャラクターをまとった詩人たちの詩についての談話という性格を帯びていることを考えれば、構造上の破綻とはいえないだろう。

15 “Ille ego qui . . .”はウェルギリウスのみならずオウィディウスも、過去に手を染めた文学ジャンルを回想する文章で用いている。“Ille ego qui fuerim, tenerorum, lusor amorum” (*Tristia* IV, x, 1), “ille ego sum, qui te colui, quem festa solebat / inter convivas mensa videre tuos: / ille ego, qui duxi vestros Hymenaeon ad ignes, / et cecini fausto carmina digna toro” (*Ex Ponto* I, ii, 129-32). そのヴァリエーションとしては“Hic ego qui iaceo . . .” (*Tristia* III, iii, 73-76) がある。

How frute vnto their gredie luste thei might constrayne to bring,
 A worcke of thanks: Lo now of Mars and dreadfull warres I syng,
 (Virgil, *Aeneid*. Tr. Thomas Phaer. *The seuen first bookes of the Eneidos of Virgill*, 1558)

牧歌、農耕詩、叙事詩という順序で次第に規模も大きく、公的な要素の強いジャンルに移行していくことは、ウェルギリウスの詩人としてのキャリアであり、これが後の詩人たちにパラダイムを与えた、としばしばいわれる¹⁶。ピアズが「下賤な田舎者を見捨てて／いやしい塵の中から身を起こせ／血なまぐさいマルス、戦、馬上槍試合を歌うのだ」という薦めが、このパラダイムに沿っていることをカディも理解している。カディが

Indeede the Romish Tityrus, I heare,
Through his Mecænas left his Oaten reede,
 Whereon he earst had taught his flocks to feede,
 And laboured lands to yield the timely eare,
 And eft did sing of warres and deadly drede,
 So as the heauens did quake his verse to here.
 (*The Shepheardes Calender*, “October”, 55-60)

16 牧歌・農耕詩・叙事詩という三つのジャンルのパラダイムは「ウェルギリウス環」(*Rota Vergilii*, Virgilian Wheel) と呼ばれている。このパラダイムを唱えたのは、13世紀前半の英国人文法家、ガーランドのジョン (Johannes de Garlandia, John of Garland c1195-c1270) である。パリ大学での教育のため、ラテン語散文、古典韻文、中世韻文などを集めた教科書『パリの詩論』(*Parisiana poetria* c1240) を書いた。この中でジョンは、ウェルギリウスの主たる作品である『牧歌』、『農耕詩』、そして叙事詩『アエネーイス』を取り上げ、それぞれのジャンルにふさわしい文体、ライフスタイル、職業、登場人物、動物、持ち物、場所、植物を割り当て、それを円を三分割して示した。これが「ウェルギリウス環」と呼ばれるものである。

というとき、Romish *Tityrus* とはウェルギリウスに他ならず、ウェルギリウスがマエケナスに勧められて牧歌・農耕詩から叙事詩へと移ったことに思いを馳せているのである¹⁷。

スペンサーは農耕詩と呼べるものは書いていないものの、牧歌『羊飼の暦』の約10年後に、『妖精の女王』という女王を中心に据えたイングランドの国家的叙事詩を出版することになるので、カディに対するピアズの助言は詩人スペンサー自身の展望を示していると理解することができる。確かに『妖精の女王』の冒頭にスペンサーが詩人の声で宣言しているのは、自らをウェルギリウスになぞらえる詩人としてのキャリアアップの宣言であった。

Lo I the man, whose Muse whylome did maske,
As time her taught, in lowly Shephards weeds,
Am now enforst a farre vnfitter taske,
For trumpets sterne to chaunge mine Oaten reeds:
 And sing of Knights and Ladies gentle deeds,
 Whose praises hauing slept in silence long,
 Me, all too meane, the sacred Muse areeds
 To blazon broadre emongst her learned throng:

17 10月の木版画は必ずしもテキストと合致していない。前景では顎鬚を生やし、桂冠をかぶった年長と思われる羊飼いが、年下と思われる羊飼いにパンパイプを差し出している。ケイン(Thomas H. Cain)は左の人物ピアズに仮託されたウェルギリウスが右の人物カディに麦笛(正しくはパンパイプ)を渡そうとして受け取りを拒否されている、とみなしている。(Cain, 167)。しかし、カディはパイプを拒否しているとは思われず、カディは牧歌的場面には不似合いな後景のローマ風石造建築の階を上って行く人物を指差し、読者の注意を促しているように見受けられる。このポーズはカディの古典的叙事詩への関心を示すように思われる。パンパイプはパストラルの象徴であるが、詩の象徴とも考えられるから、この構図は、ヴェルギリウスからスペンサーに叙事詩の伝統が受け継がれることを示しているとするほうがよいのではないだろうか。

Fierce warres and faithfull loues shall moralize my song.

(*The Faerie Queene*, I. Proem 1-9)

ヘルガスン (Richard Helgerson) はスペンサーが私的な領域での詩作から公的な領域、国家の歴史と道徳に関わる仕事としての詩作をめざしたことをとらえて、彼を「自称桂冠詩人」(self-crowned laureate) と呼んだ。しかし、10月の牧歌に予言されているのは、決して一直線のウェルギリウスのようなキャリアではない。『羊飼の暦』10月のピアズは、叙事詩の執筆を薦めるばかりではなく、愛をも神聖・崇高なもの、靈感の源とみなし、時にはリュートに合わせて歌われるような恋愛詩も書くがよい、と説いている。

And when the stubborne stroke of stronger sounds,

Has somewhat slackt the tenor of thy string:

Of love and lustihead tho mayst thou sing,

And carrol lowde, and leade the Myllers rownde,

(*The Shepheardes Calender*, “October”, 49-52)

愛を扱うことの勧めは、ウェルギリウスが『アエネーイス』で軍神と戦を謳う、としていることと対照的に、先に見た『妖精の女王』第1巻序歌 (Proem) 最終行で、「激しい戦」と並んで「忠実な愛」もまた自作に道徳性を与えうる要素と見なすところにも実現している。さらに、宗教詩を含む多様なジャンルへの挑戦もほのめかされる。

Then make thee winges of thine aspyring wit,

And, whence thou camst, flye backe to heaven apace.

(*The Shepheardes Calender*, “October”, 83-84)

詩にふさわしい材料が俗世になれば天上のことを歌うがよい、と示唆しているのである。このことを詩人スペンサーのその後の作品と比較してみよう。彼は『妖精の女王』の最初の3巻を出版した後、1595年に『コリン・クラウト故郷に帰る』(*Colin Clouts Come Home Againe*)において再び牧歌に筆を染めている。同年、個人的色彩の濃い恋愛ソネット集『アモレッティ』(*Amoretti*)を出版し、その翌年に愛と美の地上から天上への昇華を歌った『四つの賛歌』(*Four Hymns*)を出版することになる。この道筋は、まさにピアズの助言を実現するかのようである。その他、ウェルギリウスにはないさまざまなジャンル——たとえば諷刺詩、賛歌、結婚祝歌など、そして、現在では失われているが、英詩評論やコメディさえも書いていたことが書簡などに示唆されており、牧歌から叙事詩、私から公というキャリアにスペンサーを押し込むことは単純に過ぎるであろう。ウェルギリウスはスペンサーのキャリア・モデルの一つであったが、スペンサーは他の可能性も探っていたのである。

一方のカディはワインの与える靈感によって詩神に編み上げ半長靴 (buskin) をはかせる (= 悲劇を書く) 希望も持っている。

Cuddie

.....

And when with Wine the braine begins to sweate,
The numbers flowe as fast as spring doth ryse.

Thou kenst not Percie howe the ryme should rage.

O if my temples were distaind with wine,

And girt in girlonds of wild Yuie twine,

How I could reare the Muse on stately stage,

And teache her tread aloft in buskin fine,

With queint Bellona in her equipage.

(*The Shepheardes Calender*, “October”, 107-14)

しかし現実にはワインは北国イングランドの牧人である彼の手には入らない。酒のない状態では、「靈感も沸く前に冷め」、木蔭でか細い笛を吹く羊飼いの境遇にとどまるのである。

But ah my corage cooles ere it be warme,
For thy, content us in thys humble shade:
Where no such troublous tydes han us assayde,
Here we our slender pipes may safely charme.

(*The Shepheardes Calender*, “October”, 115-18)

羊飼いとどまる、というカディの選択は、スペンサー自身の詩的なキャリアにも反映することになる。スペンサーは確かに叙事詩へと手を広げはしたが、悲劇を書くことにはならず、最後まで牧歌を捨てることはなかったからである。ただし、カディが悲劇の高いスタイルに能力が届かないために牧歌にとどまるのに対し、スペンサーは牧歌を叙事詩と組み合わせ、詩人としての自己を探る装置とするのである。

表1からもうかがえるように、スペンサーの牧歌は初期の『羊飼の暦』で終わることなく、後期の『コリン・クラウト故郷に帰る』(1595)、そして、『妖精の女王』第6巻(1596)にも書かれ続けた。コリンは登場しないものの、『時の廃墟』(*The Ruines of Time* 1591)、『ダフナイダ』(*Daphnaïda* 1596)、そして死後に出版された「無常篇」(*The Mutabilitie Cantos* 1609)の3編では、語り手あるいは作中人物がコリンに言及する。

『コリン・クラウト故郷に帰る』はスペンサーの伝記的要素が最も明瞭に現れた作品である。そこでは、羊飼いコリン・クラウトはアイルランド南部の山河の伝説を歌い、「大洋の羊飼い」(*The Shepherd of the Ocean*)に誘われて海を

越えてシンシア（Cynthia）の宮廷に赴いた話を仲間の羊飼いたちに話す。コリンは宮廷に集う数多の羊飼い（＝詩人）たちにまじって歌を歌う機会に恵まれ、貴婦人たちの愛顧も受けながら¹⁸、一方では権謀術数と不純な愛の横行に嫌気がさして故郷に戻ってきたのだという。『コリン・クラウト故郷に帰る』は羊飼いを登場させてはいるが、約 1000 行というその長さから、チェイニー（Patric Cheney）はこれを小叙事詩（minor epic）というエリザベス朝特有のジャンルに属する、としている。（“Spenser’s Pastorals” 97）そうであるならば、まさにスペンサーは牧歌と叙事詩のジャンルを結びつけたことになる。

ウェルギリウスがその牧歌に自らの境遇とローマの運命を歌いこんだように、『コリン・クラウト故郷に帰る』がスペンサー自身の人生を、牧歌の薄いヴェールに包んで差し出したものであることは明らかである。スペンサーはアイルランド南部に官職と住居を持っていたが、その近くにはウォルター・ローリー（Sir Walter Raleigh）もエリザベス朝イングランドのアイルランド植民政策に伴って、広大な領地を与えられていた。1589 年の秋に Raleigh はスペンサーの屋敷を訪問し、『妖精の女王』の原稿を見る機会があったと考えられている。（Koller 41）そして、スペンサーは『妖精の女王』の最初の 3 巻をロンドンで出版するさい、ローリーに導かれてイングランドへ赴き、エリザベス女王に拝謁し、年金 50 ポンドを与えられている。しかし、女王の謁見と年金の贈与は、スペンサーにイングランドでの官職を与えるものとはならず、彼は宮廷を去る。作中でコリンが宮廷に行き、再び牧歌世界に戻るように、詩人スペンサーもロンドンに行き、再びアイルランドに戻ったのである。また彼は『妖

18 例えば、『コリン・クラウト故郷に帰る』の執筆に先立って出版された『妖精の女王』初版（1590）に付された 17 編の献呈ソネットの中には、メアリー・シドニー（Mary Sidney, Countess of Pembroke）、エリザベス・ケアリ（Elizabeth Carew）、さらに実名は入れられていないが「宮廷の全ての優雅で美しい貴婦人がた」に宛てられたソネットが含まれる。コリンがそうであったように、スペンサーもエリザベスの宮廷で貴婦人たちの知己を得たことが知られる。

精の女王』という叙事詩を出版し、その後この『コリン・クラウト故郷に帰る』という牧歌を書いている。スペンサーの官僚としてのキャリアと詩人としてのキャリアは、この作品においてもっとも緊密な関係を示している。

最後に、後期の作品の中から、牧歌と叙事詩の組み合わせの興味深い例として、1596年に出版された『妖精の女王』後半の最後の第6巻を挙げたい。礼節（Courtesy）を寓意的主題としたこの巻は、騎士キャリドア（Calidore）が誹謗中傷を体現する「喧しい獣」（Blatant Beast）を追って旅をする物語である。キャリドアは途中で牧畜の世界に迷い込み、そこで円舞を繰り広げる100人の乙女たちを目撃する。その中心には踊る三美神がおり、さらに三美神の中心にはひととき美しい羊飼いの乙女が見える。この舞踏のために一人の羊飼いが一心に音楽を奏でているが、羊飼いは最も中心にたたずむ乙女に恋し、この乙女のために笛を吹いているのである。この場面は、叙事詩の中に置かれた牧歌であり、礼節を主題とする『妖精の女王』第6巻の象徴的なクライマックスである。

. . . But that faire one,
 That in the midst was placed parauaunt,
 Was she to whom that shepheard pypt alone,
 That made him pipe so merrily, as neuer none.

She was to weete that iolly Shepheards lasse,
 Which piped there vnto that merry rout,
That iolly shepheard, which there piped, was
Poore Colin Clout (who knowes not Colin Clout?)
 He pypt apace, whilst they him daunst about.

(*The Faerie Queene*, V. x. 15.6-16.5)

ここで読者はいくつかの疑問を抱くことになる。語り手は、“iolly shepheard”¹⁹の正体が“Poor Colin Clout”であると言うが、何度も“jolly shepheard”と呼ばれながら、どのような意味でコリンは“Poor”なのだろうか？ また“who knowes not Colin Clout?”という修辞疑問は、コリンが有名人であることを示唆するが、それは、どのようなレベルでの話なのだろうか？ もちろん表面上は、『妖精の女王』の物語内の、この牧歌世界の界限でコリンを知らぬものはない、と言っているのである。しかし、その部分が括弧で囲まれていることを考えると、これは詩人スペンサーの声の乱入だと見るのが自然ではないだろうか。詩人は、17年前の駆け出し時代に出版した『羊飼の暦』、1年前に出版した『コリン・クラウト故郷に帰る』といった、コリンが登場する自らの牧歌作品を思い出すよう読者にむかって要求している。『妖精の女王』の語り手の声我突然、詩人スペンサーの声になり、自らの作品群のうち、牧歌に類するものを辿り、詩人としての来し方を回想しているともいえよう。これに続く行で語り手は三たび“iolly shepheard”に呼びかけ、“pype thou now apace / Unto thy loue”と、恋人のために音楽を奏できるようコリンを鼓舞する。キャリドアが好奇心からこの音楽シーンに割ってはいると、群舞していた乙女たちは消えてしまうが、コリンは

19 “iolly shepherd”という呼びかけは、スペンサー以前では、トラディショナル・ソングに含まれるクリスマス・キャロルに見ることができる。スペンサー以降では、シェイクスピアの『リア王』(*King Lear*, III, vi, 41-44)におけるエドガーの戯れ歌、レイヴンズクロフト(Thomas Ravenscroft)の歌集『パミーリア』(*Pammelia* 1609)に含まれる“Jolly Shepherd”、『チャイルド古謡集』(*The English and Scottish Popular Ballads* 1882-1898)に含まれる“Robin hood and the Shepherd”の一節にこの呼びかけが見られる。それらが『妖精の女王』のこの一節を念頭においているかどうかは不明である。“iolly”の形容辞は『妖精の女王』第1巻冒頭においては赤十字の騎士を指しても用いられている。(I.i.2.1) そこの意味に関しスティール(Steele)は、「陽気な」「ごきげんな」という意味でなく、「立派な」「あっぱれな」「みごとな」といった意味に解すべきであるとしている。(268)

キャリドアにこの光景の意味を解き明かす。その最後にコリンは妖精の女王グロリアーナ（Gloriana）に呼びかけて一つの嘆願を行う。

Great *Gloriana*, greatest Maiesty,
 Pardon thy shepheard, mongst so many layes,
 As he hath sung of thee in all his dayes,
To make one minime of thy poore handmayd,
 And vnderneath thy feete to place her prayse,
 That when thy glory shall be farre displayd
 To future age of her this mention may be made.

(*The Faerie Queene*, VI. x. 28. 1-7)

コリンはこれまでずっとグロリアーナを称えてきたが、短い音符の分だけあなたの侍女を歌うこと（“one minime of thy poore handmayd”）を許してほしい、と訴える。しかし、ここで声を発しているのは誰だろうか？続くスタンザで“that shepherd ended had his speech”とあるところから、表面上は嘆願しているのはコリンであるが、彼は自らを“he”と三人称で呼んでいる。また、自らを“thy shepheard”とも呼んでいる。しかし『羊飼の暦』の「四月」ではイライザ（Eliza）を、1年前の『コリン・クラウト故郷に帰る』ではローリーにならないシンシアを讃えたコリンが、グロリアーナを称える歌を歌ったことは実はこれまでには一度もなかったのだ。結局、イライザ、シンシア、グロリアーナに託して女王エリザベスを歌ってきた「あなたの羊飼」とはスペンサーにはかならず、再びこれも自己言及的な詩人の声の乱入である。「短い音符」が指すのは、物語上はコリンが三美神の中央に立つ羊飼いの娘を称えることである。しかし詩人のレベルでの「短い音符」とは、スペンサーが自らの再婚を記念して、恋愛ソネット集『アモレッティと祝婚歌』（*Amoretti and Epithalamion*）を出版することを指していると考えられる。公の権力者であるエリザベスを称える『妖

精の女王』の後半三巻の執筆と、個人的な幸福を歌う『アモレットティと祝婚歌』の執筆とは同時に進行し²⁰、後者はスペンサーの再婚の翌年（1595）に出版された。ペトラルカ以来の恋愛ソネットの伝統を考えると、相手の女性への求愛が成功し、結婚に終わるというストーリーを持つ『アモレットティと祝婚歌』は、個人的日常への帰着という意味で、恋愛ソネット集の一つの終着点に行き着いたといえよう。この牧歌のシーンへの詩人の乱入は叙事詩『妖精の女王』のパブリックな詩人が、恋愛詩『アモレットティと祝婚歌』のプライベートな詩人でもある自己を開示する瞬間である。

『妖精の女王』第6巻の最後は、再び詩人の自らの作品への呼びかけで終わっている。

Ne may this homely verse, of many meanest,
 Hope to escape his [=Blatant Beast's] venomous despite,
 More then my former writs, all were they clearest
 From blamefull blot, and free from all that wite,
 With which some wicked tongues did it backebite,
 And bring into a mighty Peres displeasure,
 That neuer so deserued to endite.
 Therefore do you my rimes keep better measure,
 And seeke to please, that now is counted wisemens treasure.
 (*The Faerie Queene*, VI.xii.41.1-9)

この巻の主人公キャリドアは誹謗中傷を表す「喧しい獣」を捕獲するが、この獣は再び世界を跋扈するようになる。スペンサーは自らもその害を蒙ることを

20 『アモレットティ』80番で、詩人は、『妖精の女王』の第6巻までが完成し、続編を書くまでしばし休憩し、その間に、恋人への賛歌を書く意図を洩らしている。

予測し、今まさに閉じられようとするこの作品も「悪意を逃れる望みはあるまい」と諦め、それは不当に「悪意のある舌の中傷を受け／さる有力な貴人の不興を買った」これまでの作品と同様である、と悲しむ。ここにほのめかされているのは、『妖精の女王』の最初の三巻の出版がバーリー卿ウィリアム・セシルの不興を買ったことだとされている²¹。それゆえ、詩人は最後に「我が韻よ」(“you my rimes”)と作品に呼びかけ、リズムを整えて耳に心地よく響くように、今の世ではそれが賢明な者の秘訣だから、と教えるのだ。叙事詩人として成功を収めたはずのスペンサーだが、決してファンファーレのような詩行で作品を締めくくりはしていない。公の世界で詩を書くことの困難を意識し、measure-threasure とフェミニン・ライムを用いて半ば自嘲ぎみに、もっと権力者を喜ばせる作品を書く意志を一諦めを一を語るのである。第16, 28スタンザでは、騎士を歌う『妖精の女王』という叙事詩の世界にあって、羊飼いはいかにもみすぼらしい存在として、コリンも恋人の乙女も“poor”と表現されていたが、ここで我々は初めて語り手がコリンを“poor”(哀れな)とみなす真の理由を理解する。『妖精の女王』第6巻のコリンはスペンサーが詩人としての自己を見つめるときの鏡である。自ら叙事詩人を任じ、権力に媚びて生き延びる意志と、その苦痛の裏で、個人的な愛の詩を書く自分を鼓舞するスペンサー。そこには、『羊飼いの暦』に見せた、古典と競う若い詩人の気負いはもはやなく、詩人としての来し方行く末に思いを馳せる、円熟した、それでいて深い寂寥すら漂う詩人が姿を表している。

むすび

以上において、スペンサーの最も早い時期と遅い時期の作品をみながら、そ

21 第6巻は第4、第5巻とともに、1596年の『妖精の女王』第2版で初めて上梓された。そのときの第4巻の冒頭は明らかにバーリーと分かる人物「額に皺を寄せた方」“The rugged forehead”が、初版の第3巻のエロティシズムを厳しく非難したことを述べている。

ここに現れた詩人の自己の表出を見てきた。スペンサーは叙事詩を書くようになってからも最後まで牧歌を手放すことなく、詩人としての自己の位置を見定める装置として牧歌を用いた。官僚と詩人、公の詩人と私の詩人、詩における先達ウェルギリウスとの関わり、英詩における先達チョーサーとの関わり、パトロンや権力者との関わり、こういったすべての問題が、スペンサーの牧歌には包含されているのである。

参考文献

- Alwes, Derek B. “‘Who knowes not Colin Clout?’ Spenser’s Self-Advertisement in *The Faerie Queene*, Book 6.” *Modern Philology* 88 (1990): 26-42.
- Cain, Thomas H. “Introduction” to *The Shepheardes Calender*. *The Yale Edition of the Shorter Poems of Edmund Spenser*. Eds. William A. Oram et al. New Haven: Yale UP, 1989. 3-10.
- Chaucer, Geoffrey. *Troilus and Criseyde*. Ed. D. S. Brewer and L. F. Brewer. London: RKP, 1969.
- Cheney, Patrick. *Spenser’s Famous Flight: A Renaissance Idea of a Literary Career*. Toronto: U of Toronto P, 1993.
- . “Spenser’s Pastorals: *The Shepheardes Calender* and *Colin Clouts Come Home Againe*.” *The Cambridge Companion to Spenser*. Ed. Andrew Hadfield. Cambridge: Cambridge UP, 2001.
- Helgerson, Richard. *Self-Crowned Laureates: Spenser, Jonson, Milton and the Literary System*. Berkeley: U of California P, 1983.
- Heninger, S. K. “*The Shepheardes Calender*.” *The Spenser Encyclopedia*. Ed. A.C. Hamilton et al. Toronto: U of Toronto P, 1990. 645-51.
- Hollander, Robert. “Dante’s (and Boccaccio’s) *bella scola* and Geoffrey Chaucer’s: The Envoy of the *Troilus*.” *Electric Bulletin of the Dante Society of America*. Ed. Richard Lancing. 9 July 2008. The Dante Society of America. 4 April 2009 <http://www.princeton.edu/~dante/ebdsa/hollander_081608.html>.
- Horace. *Odes and Epodes*. Tr. Niall Rudd. Loeb Classical Library. Cambridge, Mass.: Harvard UP, 2004.
- . *Q. Horatii Flacci Venusini, poetae lyri, poemata omnia doctissimis scholijs illustrata*. London: William Norton, 1574..

- John of Garland. *Parisiana Poetria*. Ed. with Trans. Traugott Lawler. Yale UP, 1974.
- Johnson, Lynn Staley. *The Shepheardes Calender: An Introduction*. University Park: Pennsylvania State UP, 1990.
- Koller, Kathrine. "Spenser and Raleigh." *ELH* 1:1(1934): 37-60.
- Maley, Willey. *A Spenser Chronology*. Basingstoke, Hants.: Macmillan, 1994.
- Oram, William A. "Introduction: Spenser's Paratexts." *Studies in the Literary Imagination*. 38 (2005): vii-xviii.
- Ovid. *Tristia. Ex Ponto*. Tr. Arthur Leslie Wheeler. Rev. G. P. Goold. 2nd ed. Loeb Classical Library. Cambridge, Mass.: Harvard UP, 1996..
- . *The thre first bookes of Ouids De tristibus, translated into Englishe*. Tr. Thomas Churchyard. London : Thomas Marshe, 1572.
- Rumbuss, Richard. *Spenser's Secret Career*. Cambridge: Cambridge UP, 1993.
- . "Spenser's Lives, Spenser's Careers." *Spenser's Life and the Subject of Biography*. Ed. Judith Anderson, et al. Amherst: U of Massachusetts P, 1996.
- . "Spenser's life and career." *The Cambridge Companion to Spenser*. Ed. Andrew Hadfield. Cambridge: Cambridge UP, 2001.
- Schoeck, R. J. "'Go Little Book'—A Conceit from Chaucer to William Meredith." *Notes and Queries*. 197:17 (1952): 370-72.
- Spenser, Edmund. *The Faerie Queene*. Ed. A. C. Hamilton. Harlow: Longman-Pearson Education, 2001.
- . *The Yale Edition of the Shorter Poems of Edmund Spenser*. Ed. William A. Oram et al. New Haven: Yale UP, 1989.
- . *Selected Letters and Other Papers*. Ed. Christopher Burlinson and Andrew Zurcher. Oxford: OUP, 2009.
- Statius. *Thebaid*. Tr. D. R. Shackleton-Bailey. Loeb Classical Library. 2vols. Cambridge, Mass.: Harvard UP, 2003.
- Steele, Oliver. "Recent Editions of the *Faerie Queene*." *Philological Quarterly* 59:3 (1980): 268-99.
- Tatlock, John S. P. "The Epilog of Chaucer's Troilus." *Modern Philology* 18 (1921): 625-59.
- Virgil. *Aeneid*. Tr. H. R. Fairclough. Loeb Classical Library. Cambridge, Mass.: Harvard UP, 1978.
- . *The bucolikes of Publius Virgilius Maro with alphabeticall annotations vpon proper names of gods, goddesses, men, women, hilles, flouddes, cities, townes, and villages &c. orderly placed ...* Tr. Abraham Fleming. London : Thomas Woodcocke, 1575.
- . *Pub. Virgilii Maronis opera De integro collatis probatissimae fidei exemplaribus*,

diligentissimè restituta, ac doctissimis scholijs & annotationibus Pauli Manutij in margine ascriptis, illustrata. [London] : Henry Bynneman, 1570.

—. *The seuen first bookes of the Eneidos of Virgill*. Tr. Thomas Phaer. London : Richard Iugge, 1558.

—. *Vergiliana poesis que latinitatis norma est et propulsatis [and] elimatis [sic] omnibus mendis felici gaudet exordio*. [London] : R. Pynson Venalis, [ca. 1515].

—. *The +xiii. Bukes of Eneados of the famose Poete Virgill*. Tr. into Scottish Gawin Douglas. London : William Copland, 1553.

ジュネット, ジェラルド 『スイユ：テキストから書物へ』 和泉涼一訳 水声社 2001

スペンサー, エドマンド 『スペンサー詩集』 和田勇一他訳 九州大学出版会 2007

—. 『妖精の女王』 和田勇一・福田昇八訳 筑摩書房 1994

水野眞理 「『アモレッティ』—演技する恋人・演技する詩人—」 光華女子大学英米文学会編 『夢の変奏—英米文学に描かれた愛』 大阪教育図書 1994